

■ エッセイ ■

乱歩歌舞伎

エビのやみあやしのかぎづめ
「江戸宵闇妖鉤爪」

創作裏話

■ 岩 豪 友樹子 ■

去る平成二十年は私にとつて三度目の奇跡が起こった年でした。二月中旬、五年ぶりに突然、国立劇場から電話がかかり、「染五郎さんと幸四郎さんが十一月に上演する歌舞伎の脚本を書いてもらいたいのですが、如何でしょうか？」とのこと。「も、もちろん書きます。で、どんな内容ですか？」

そんな話は今まで聞いたことがありません。私にそんなものが書けるのか……と一瞬思ったものの、チャンスの神様には前髪しかないことを思い出し、あわててその前髪をギョツとつかんでしまったのが事の始まりでした。

乱歩といえど誰もが知る探偵小説の巨人。『人間椅子』『芋虫』『鏡地獄』『パノラマ島奇談』『怪人二十面相』等々、妖異・耽美の万華鏡の如き作品群があり、私が小学生の時に読んだ最初の乱歩体験はやはり少年探偵団シリーズでした。

さて、その乱歩がなぜいま歌舞伎に？

言い出さずには染五郎さんで、十数年前から乱歩を歌舞伎にしたいという夢を持ち続けていたとのこと。数多くの乱歩作品が舞台や映画、テレビドラマになっていきますが、歌舞伎になったことはかつてなく、これは画期的かつ実験的な試みというわけです。

「人間豹恩田は恐ろしい殺人狂であった。単に殺人狂と

いうよりは、寧ろ一種のラストマードラアであった」

これは昭和九年一月から十年五月まで「講談倶楽部」に連載された『人間豹』の何話目かの冒頭に付されたあらすじの一節です。

気に入った女は必ず掌中にしないと気がすまないという半人半獣の恩田は、己の獣欲に従って行動し、文字通り女たちを食い殺すという最凶のストーカーぶりを発揮、ついに明智夫妻をも絶体絶命の危機に追い詰めます。

国立劇場では私が書いた新作歌舞伎が二本上演されていますが、オリジナル脚本を書いた私にとつて脚色は初めてです。昭和初期のモダンイズムただよう道具立ての中で展開される『人間豹』を読み進むほどに、これをどうやって江戸時代にもつていけばいいのかと頭を抱えてしまいました。

急遽、国立劇場のスタッフと歌舞伎座に昼夜出演中の染五郎さんとの打合せのため上京。染五郎さんが残虐非道な人間豹恩田と、恩田に恋人を次々に殺される神谷青年の二役を演じ、明智小五郎役の幸四郎さんが演出をも手がけるビッグな舞台と聞いて、今更ながら身震いしましたが、ここまできたら引き返せぬと肚を決め、乱歩漬けになること数ヶ月、「江戸宵闇妖鉤爪」の第一稿を書き上げました。

これは江戸末期を舞台に乱歩世界が毒々しい花弁を広げるといふコンセプトで作り上げたものでしたが、幸四郎さんの「あくまで恩田と明智の二人の対決にしたい。幕末の混沌とした時代に何故、恩田のような怪物が現れなければならなかったかを明らかにする必要がある。貴女が男に求める心を恩田と小五郎の台詞に込めて書いて下さい」との指摘を受け、二人の攻防に的を絞って書き直しました。勸進帳千回公演を目前にした過密なスケジュールの中でも泉のごとくあふれ出る幸四郎さんのアイデアを脚本に反映させるべく、加筆、訂正、削除、また加筆、訂正、削除…延々と続く鏡地獄に陥ったかのような焦りと不安を経て、結果的には第七稿が決定稿となりました。それでもまだ出来立てホヤホヤの新作歌舞伎とあれば、細かな演技や台詞などは日々、工夫されて変わっていくのは致し方ないことではあります。

跳梁跋扈する人間豹恩田と明智小五郎の息詰る対決、染五郎さんの大瓶での宙乗りをはじめ、乱歩的ケレンが随所に散りばめられた見どころ満載の舞台は狙い通り。その一方で、私は他の乱歩作品のいくつかを独断と偏見で作品にねじ込みました。その中で大きな比重を占めるのは「孤島の鬼」。さらわれた子供たちが化物に改造されるという話ですが、これを人間豹恩田の出生の秘密に絡ませ、虐げられた人間の哀しみを織り込みました。

実験的な試みに、コアな乱歩ファンからは意見が続出、

若い観客の口コミで評判が広がり、後半はチケットが売り切れ、最後の三日間は歌舞伎には異例のカーテンコールのおまけまでつきました。興行的には大成功に終わり、優れた新作歌舞伎脚本に対して贈られる大谷竹次郎賞の奨励賞まで受賞するという、まさに夢のようなストーリー展開となりました。

さてその間、脚本研究と脚本演習のクラスでは、脚本書きに苦しんでいる状況をタイムリーに学生たちの前にさらけ出しました。失敗したら格好がつかないと思いましたが、それはそれで生きた教材になるだろうと。日頃、山ほど課題を出され、うんうん唸っている彼らも、東京で上演される歌舞伎の脚本をここ大分でシコシコ書いている講師の苦悩に興味を持ってくれたようです。

五年前に文学部長の衛藤教授に別府大学にお招きいただき、非常勤講師として脚本研究、脚本演習を担当していますが、私自身手探りの独学で脚本を書いて今日まで至っているわけで、マニュアルがあるわけではなく、未だに試行錯誤を繰り返しています。今回、創作に近道や抜け道はないということに改めて思い知らされました。

学生たちの若い柔軟な感性にはいつも驚かされます。今思えば、創作意欲旺盛な彼らの目の輝きに励まされ続けたからこそ、この試練を乗り越えられたのかもしれない。「あれさ、うまくいったよー」と報告したいがゆえに。

(別府大学非常勤講師・戯曲作家(歌舞伎))